九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

障害とアートの新しいかたち ： NPO法人studio FLAT（神奈川県川崎市）の活動を通じて

山本, 聡美
早稲田大学

https://doi.org/10.15017/4772328

出版情報：障害史研究. 3, pp.65-67, 2022-03-25. Faculty of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

障害史研究　第３号
2022年３月 発行

《研究会サマリー》

障害とアートの新しいかたち

――NPO 法人 studio FLAT（神奈川県川崎市）の活動を通じて――

New Trends in Disability and Art; A report from NPO studio FLAT

山本　聡美
（早稲田大学）

概要：2020年１月に神奈川県・川崎市に開設された生活介護事業所 studio FLAT は、「アートが人をつなぎ、障がいあるなしに関わらず特別な呼称などない共に生きる社会を目指す」活動に取り組む NPO 法人 studio FLAT（2019年に法人格取得、理事：大平暁）が運営する、絵画制作を主とした障害者支援施設である。本発表では、まず、19世紀の欧米において萌芽した精神疾患者の表現活動への着眼が、20世紀にはフランスにおける Art brut、米国における Outsider Art などの概念とともに進展した経緯を概観した。そして精神疾患者の表現への着目が、医学的関心に加え、近代社会における「芸術（家）」の役割、表現の根源が切実に模索される過程で、パウル・クレーや、ジャン・デビュッフェら芸術家自身によって見出された概念であること、さらに、日本においては福祉や障害者教育と深くかかわって展開した歴史的経緯を概観した。その上で、studio FLAT 設立の経緯や理念を紹介し、他の活動と異なる特徴などについて若干の考察を加えた。発表後、①この活動の経済基盤について、②芸術における、アウトサイド／インサイドという線引きについて、③同様の活動の地域格差について、④近代における博物館や展覧会の成立史との関わり等の観点から質疑応答を行った。

NPO 法人 studio FLAT の活動：1990年代以降、日本においても障害者の制作物に「芸術」としての価値が見出される流れが本格化し、近年、美術市場との結びつきも深まりつつある。studio FLAT では、障害を持つ利用者の制作活動に、美大での教育を受け、自身もアーティストとしての活動を行っている法人理事をはじめとする運営スタッフが積極的に関与し、「共同制作」の場が形成されている点に、従来の福祉や教育といった仕組みとは異なる新規性がある。画材の選択や、主題、作品の大きさ、装丁などに、「正規の美術教育を受けた」プロフェッショナルの運営スタッフが関与することで、作品を、社会や経済活動と結びつける可能性が広がる。

また、studio FLAT は制作活動に特化した生活介護事業所であるが、アート市場で高く評価される突出した少数の芸術家を育成することが目的ではなく（もちろん、結果としてそのようなスターが現れる可能性を排除するものではなく、既に作品に高い市場価値が生じ、有名百貨店のポスター等に使用される作家も所属している）、むしろ活動の持続可能性（利用者が安定的に制作に従事し、適正な経済的対価と社会的評価が得られること）に重きを置いている。studio FLAT で制作された主として絵画作品は、作品そのものに買い手がつくこともある一方で、様々な商品に加工された「デザイン」として幅広い企業に採用されてもいる。こうした仕組みを通じて、最終的に、そのデザインを手にする購買者にとって、もとの絵画の制作者が障害者であるか否かという点が全く問われない状況が現実のものとなりはじめている（企業の側が、販売戦略的に「障害者のアート」というバックグラウンドを「付加価値」として利用する場合もある。また studio FLAT 側でも、現時点では必要なプロセスとして、「障害者」の作品であることを積極的に広報している）。

生活介護事業所としての studio FLAT の取り組み

を上記のような歴史的視座で俯瞰してみると、その淵源は、本発表の冒頭で概観した19世紀欧米における精神疾患者の表現活動に芸術的価値を見出す発想に求めることができるであろう。その根底には、「正常な」人間の努力や技術の錬磨では到達できない「芸術性」が、一部の精神疾患者にはおのずから備わっているとの視線が存在する。また、現代社会において遺された、数少ない「人間の手数・長時間の反復労働」が必要とされ、評価される生産領域が「芸術」であるという側面もある。例えば自閉症の特性として高い集中力で長時間の作業に従事できることから生み出された、高密度／高精度の造形に対する賞賛や感動が理屈抜きに社会に受け入れられる土壌も既に耕されていた。

一方、日本において福祉や教育の現場で蓄積されてきた活動実績が、studio FLAT の活動の制度的な基盤となっていることにも注目すべきである。つまり、2000年代に整備が進んだ障害者福祉制度に関する法制度（2003年「支援費制度導入」、2005年「障害者自立支援法」[2010年改正、2013年「障害者総合支援法」へと改正]、2013年「障害者差別解消法」公布[2016年施行]）、これに伴う自治体における福祉施策の拡充（studio FLAT が本拠を置く神奈川県、また川崎市はかなり先進的）、行政の積極的サポートが生活介護事業所としての studio FLAT 開設にとって不可欠な前提でもある。以上の視角から studio FLAT の取り組みを見た時、教育・アートが相互に補完し合う、新たな芸術活動の可能性がここを拠点に拓かれてくるように期待されるのである。

以上の報告について、以下のような質疑があった。

①このような活動の経済的基盤はどのようにして成り立っているのか。

→ studio FLAT は、もともと、社会福祉法人長尾福祉会が運営するセルプきたかせ（2007年開所）内の余暇活動として開始した。studio FLAT としての活動は、2016年に施設外での展示機会が増える状況下で活発化し、障害者の文化活動を支援する公的補助金への申請にも精力的に取り組んできた（申請への取り組みを通じて、NPO 法人としての活動理念が言語化され、整えられていった側面もある）。生活介護事業所として独立した現在では、障害者総合支援法に基づく自立支援給付（国からの介護給付費）が重要な財源となっている。開設に際しても、設備の整備には「川崎市小規模生活介護事業所整備事業補助金」（上限1,500万）の交付を受けるなど、川崎市のサポートはかなり手厚い。その他、クラウドファンディングにも取り組む。作品や関連商品の販売利益も増えつつあるようである。

②芸術において、アウトサイド／インサイドという線引きに意味はあるのか？

→ studio FLAT の活動理念に「障がいあるなしに関わらず」と掲げているように、最終的にはその線引きを無効化できることが目標であるが、現時点では「障害者のアート活動（つまりアウトサイド）」であることが、財政上の基盤（上記①で述べた補助金）であるという矛盾を内包している。やや話は逸れるが、そもそも「経済的自立を果たせていない正規の美術教育を受けたアーティスト（一般的な定義では、アート界のインサイダーと見なせるだろう）」が世に多く存在する。studio FLAT が掲げる「障がいあるなしに関わらず」という理念に基づく活動の場が、現時点では「福祉」という制度の中で居場所を獲得しながらでも作品が作られ続けることで、いつの日か行政による財政補助も不要となるような経済活動として真に自律的な運営が果たされることも可能なのではないか、その時にはアウトサイド／インサイドという線引きがさほどの意味を持たなくなるのかもしれない。

③地域格差について

→アート活動に特化した、あるいは重点を置く生活介護事業所という形態が、首都圏をはじめとする大都市圏で先駆的に実践されているもので、地方ではまだそこまでの意識が立ち遅れているのではないかとの質問に対して、補足しておきたい。確かに、studio FLAT やアトリエ・インカーブ（大阪市）など、近年の先鋭的取り組みは大都市圏に見られるが、1980年代以降に全国の福祉施設を中心に展開した、障害者によるアート活動の拠点は全国に分布している。工房しょうぶ（鹿児島市、1988年）、工房まる

（福岡市、1997年）、ボーダレス・アートギャラリーNO-MA（2004年、前提として障害のある児童等の入所・教育・医療施設「近江学園」が1946年から創作・展示活動を蓄積）など、むしろ地方において特徴ある活動が継続的に蓄積されてきた。地域というより、その意義を理解し実践できる人材の問題であるように思う。

④近代における博物館や展覧会の成立史からの視点。それらの制度が、障害者の表現活動にどう関与し、または取りこぼしてきたのか。

→発表中に触れた、1930年代に精神科医の式場隆三郎が、『白樺』派の文化人との交流からゴッホに関心を持ち、精神医学（狂気）の観点から研究に着手したという初期的段階は、欧米における潮流に掉さしていたように思う。ただし、同時期の戸川行男（早稲田大学文学部心理学教室教授）による、八幡学園利用者の作品（山下清の貼り絵を中心とする）展示に「特異児童作品展」（1938年、於早大大隈講堂）と銘打っているように、一般的な「芸術」とは異なる関心・評価軸において、作品が社会に受容されていったことが浮き彫りとなる。そのような意味でも、いわゆる芸術家の作品と「アウトサイダー・アート」を同一展示空間に並べるという「パラレル・ビジョン――20世紀美術とアウトサイダー・アート」展（1992-93、ロサンゼルス・カウンティミュージアム展・スペイン・マドリード展・スイス・バーゼル展・日本展：世田谷美術館）は画期的であった。

参考文献

ハンス・プリンツホルン『精神病者は何を創造したのか』（1922年、邦訳はミネルバ書房、2014年）

式場隆三郎『ファン・ホッホの生涯と精神病』（聚楽社、1932年）

Roger Cardinal *Outsider Art* Littleh ampton Book Services Ltd, 1972

ボーダレス・アートミュージアム NOMA・滋賀県社会福祉事業団監修『アール・ブリュット・ジャポネ展全貌 2010年パリ』（現代企画室、2011年）

エミリー・シャンプノワ（西尾彰泰・四元朝子訳）『アール・ブリュット』（白水社文庫クセジュ、2019年、原著は2017年）

服部正『アウトサイダー・アート 現代美術が忘れた「芸術」』（光文社新書、2003年）

NPO 法人 studio FLAT：下記サイト参照
https://jetone5.wixsite.com/flat